



第15回チャンピオンズカップ(G I)優勝馬 ホッコータルマエ

ついに掴んだダート王の座

ホッコータルマエ

Hokko Tarumae

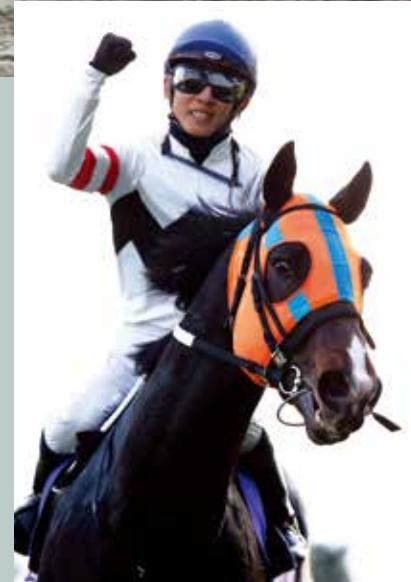
2000年にジャパンカップダートとして創設以降、東京で8回(うち1回は中山で代替開催)、阪神で6回開催されてきた秋のダート王決定戦。この年から舞台を中京へと移し、レース名も「チャンピオンズカップ」と改められた。国際招待競走ではなくなったが、米国からはインペラティヴが参戦。JBCクラシック組を中心とした日本勢がこれを迎え撃った。

中心は、進境著しい4歳馬コパノリッキー。最低人気でフェブラリーSを制して以降は、かしわ記念を楽勝、帝王賞2着、そしてJBCクラシックで3馬身差圧勝と、すっかりダート戦線の主役に。1番人気に推されたが、ゲートが開くと、なんとそのコパノリッキーは出遅れてしまう。4万4,461人の大観衆がどよめく中、逃げたのはクリノスター、2番手にホッコータルマエという形でレースは進んだ。

ペースが落ちていたこともあり、クリノスターをいつでも交わせる手応えで進んだホッコータルマエは、最終コーナーを回るや早々と先頭に立つ。コパノリッキーは勝負どころで外から懸命に上昇するも、直線で伸びず。並びかけようと食らいつくローマンレジェンドを振り切ったホッコータルマエが、最後に脚を使ったナムラビクターの猛追も抑えて先頭でゴール。半馬身という着差以上の、余裕を感じさせる走りだった。

ホッコータルマエは3月のドバイ・ワールドCでしんがり負け、レース後にはストレス性胃腸炎で帰国が遅れた。さらに帰国後も調整がうまくいかず、やっと復帰したJBCクラシックも、らしくない走りで4着。鮮やかな復活劇となった。

これまで地方交流G I・Jpn Iでは5勝をあげていたホッコータルマエだが、意外なことにJRAのG Iはこれが初制覇。人馬ともに待ち望んだ勝利は、まさに砂の現役最強馬の証明でもあった。これが決め手となり、ホッコータルマエは2014年度JRA賞最優秀ダートホースの座も射止めている。



第15回チャンピオンズカップ(G I)

12/7 中京競馬場 1800m(ダート・左) 晴・良 16頭

着順	馬名	性齢	斤量	騎手	調教師	タイム/着差	人気	通過順位
1	ホッコータルマエ	牡5	57	幸 英明	西浦勝一	1:51.0	②	2 2 2 2
2	ナムラビクター	牡5	57	小牧 太	福島信晴	1/2	⑧	5 5 4 4
3	ローマンレジェンド	牡6	57	岩田康誠	藤原英昭	3/4	③	5 5 2 2
4	サンビスタ	牝5	55	松田大作	角居勝彦	1 1/4	⑯	12 10 6 7
5	ワンダーアキュート	牡8	57	武 豊	佐藤正雄	3/4	⑤	14 13 13 13
6	ワイドバッハ	牡5	57	蛯名正義	庄野靖志	ハナ	⑩	15 15 16 16
7	カゼノコ	牡3	56	秋山真一郎	野中賢二	1/2	⑭	15 16 15 15
8	クリスターオー	牡4	57	P.ムーア	高橋義忠	クビ	⑦	1 1 1 1 1 1
9	グレープブランデー	牡6	57	北村宏司	安田隆行	ハナ	⑯	3 3 4 4
10	インカンテーション	牡4	57	大野拓弥	羽月友彦	3/4	④	12 13 11 11
11	ベストウォリア	牡4	57	戸崎圭太	石坂 正	1 1/2	⑨	5 7 8 7
12	コパノリッキー	牡4	57	田辺裕信	村山 明	1 1/4	①	8 10 11 10
13	ニホンピロアワーズ	牡7	57	酒井 学	大橋勇樹	1 1/4	⑫	3 3 7 7
14	クリソライト	牡4	57	W.B.ビュイック	音無秀季	3	⑥	8 7 4 6
15	インペラティヴ	駆4	57	K.デザード	G.ルイ・ド・モー	1 1/4	⑪	8 10 13 11
16	ダノンカモン	牡8	57	松山弘平	池江泰寿	1 1/2	⑯	8 7 8 13

単勝⑧590円 複勝⑧190円 ④440円 ⑫270円 枠連(2-4)1,900円
馬連④-⑧5,470円 馬単⑧-④9,020円 ウイド④-⑧1,470円 ⑧-⑫720円 ④-⑫2,400円
3連複④-⑧-⑫11,730円 3連単⑧-④-⑫70,890円

ハロンタイム 12.6-11.7-13.2-12.9-11.9-12.2-12.4-11.7-12.4
通過タイム 600m 37.5-800m 50.4-1000m 1:02.3-1200m 1:14.5-1400m 1:26.9-1600m 1:38.6

優勝馬 ホッコータルマエ

2009.5.26生 父キングカメハメハ 母マダムチョロキー 母の父Cherokee Run
浦河・市川ファーム生産 馬主:矢部道晃氏